

2023年4月24日（月）

老球の細道727号

スポーツと戦争

会津バスケットボール協会 室井 富仁

1870～71年、ビスマルク擁するプロイセン（現ドイツ）に宣戦布告したフランスは圧倒的な差で敗退した（普仏戦争）。この戦争によって敗退したフランス青年の自信喪失を回復するために、仏のピエール・クーベルタン（教育家、軍人、貴族）はイギリスのパブリック・スクールのスポーツ教育を視察した。同じ頃にギリシャで古代五輪の遺跡が発見された。古代五輪が開催されている時期はポリス間の戦争は一時休戦となり、戦争で殺戮し合った国同士の若者たちがスポーツ競技で親善を深めたという故事を知る。

これらのことからクーベルタンは、戦争に明け暮れていたヨーロッパに平和をもたらすためには異国の若者たちがスポーツや芸術を通じて交流、親善を深めれば、必ずや戦争がなくなるに違いないと近代五輪を創案した。第1回を古代五輪の聖地アテネで開催した。

先日、ウクライナ五輪委員会がロシア、ベラルーシの選手の参加する国際大会に、自国の選手が参加したら処罰を検討するという声明を発表した。戦時下であるため、国の利益が個人の希望より優先すべきだということである。これに対してウクライナのスポーツ選手たちは猛反発している（戦争に関与しない女子選手たちは他国で練習に励んでいる）。

ウクライナがこのような声明を発表したのは、以前にIOC（国際五輪委員会）が、パリ五輪や各競技の国際大会において、ロシア、ベラルーシの選手を「中立」の立場で個人参加を認める方針を打ち出したからである。この方針に対してウクライナは五輪ボイコットをちらつかせて大反発している。

IOCはウクライナの五輪ボイコットは「五輪憲章」の違反に値すると遺憾の意を表し、五輪憲章第3条「人種、宗教、政治を理由として差別してはならない」を上げて、いかなる選手もパスポートのみを理由に大会参加を妨げてはいけないと述べた。しかし、戦時下であり戦争状況がさらに悪化する中でIOCの立場は多くの国から支持されているとは言えない。

日本を含む34ヶ国はIOCに対して「中立」の定義を明確にするよう声明を出した。ロシア、ベラルーシの選手が国の財政支援を受ける中での参加を「中立」と言えるのかと。

パリ五輪を前にした各国際競技団体は、個人競技（テニス、水泳等）はIOCの意向に賛同しているが、団体競技（ラグビー、バスケットボール等）は反対でロシア、ベラルーシの参加は認めない。団体競技は国を背負う重みがあるので中立の立場は難しいという。

戦争などの国際紛争を失くすために創案されたスポーツの祭典「五輪」だからこそ、このような現状においても戦争当事国の選手たちに参加させて停戦に向けてのきっかけにするか。冗談じゃない、侵攻した国の選手達には参加する資格はない。もし参加したらテロ（第20回ミュンヘン大会〈1972〉で中東戦争の影響でイスラエル選手団がアラブゲリラに襲撃され死傷多数輩出）やトラブルなどで五輪がメチャクチャになってしまうだろう。

ウクライナの判断とIOCの判断、私たちはどちらを支持したら良いのだろうか。